



TITLE:

# 自由14 冷温帯林に生息するニホンザルの生態と生息環境の保全(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

船越, 美穂

---

CITATION:

船越, 美穂. 自由14 冷温帯林に生息するニホンザルの生態と生息環境の保全(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1999, 29: 107-107

ISSUE DATE:

1999-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165241>

RIGHT:

白神山地におけるニホンザルの生息状況 2  
揚妻直樹 (秋田経済法科大学・経済学部)

白神山地西部の秋田県八森町に生息する野生ニホンザルの生息状況の把握を試みた。八森町内の林道を巡回し、サルおよびサルの生息痕の発見につとめた。また、発信器のついた3頭のサル(成オス単独個体2頭、成メス1頭)に関してはテレメトリー法によって彼らの遊動様式を調査した。調査は1998年6月、9月から1999年1月および3月に、毎月2-3日間ずつ、合計20日間行った。テレメトリー調査によって、発信器をつけた3個体は、互いに遊動域のほとんど重複させており、農耕地の周辺を集中的に利用していることが解った。また、この3個体はお互いに離れたり、近づいたりしていることも解った。実際、1月にはオスの2頭が他のオス1頭と共にいるのが観察された。また、3月には群れから離れてメスとオスの1頭が近接し、行動を共にしていたのを確認している。最外郭法で求めた調査期間中の遊動域面積はオスが3.0km<sup>2</sup>と4.9km<sup>2</sup>、メスが2.9km<sup>2</sup>と狭かった。また、1日当たりの移動距離はオスが1.1-3.1km(平均2.3km)と1.3-4.2km(2.8km)、メスが1.5-4.0km(2.5km)であった。ただし、日によって移動距離は大きく異なる傾向が見られた。テレメトリー調査、雪上の足跡調査、直接観察の結果から八森町内には少なくとも4群のサルが生息していることが解った。確認された群れサイズは小入川周辺の群れが34頭(成オス5頭、成メス9頭)、滝の間周辺の群れが18頭(2、4)、泊川林道の群れが27頭(3、6)、春秋林道の群れが16頭(昨年度調査結果より)であった。ただし、八森町内にはあと何群かが生息している可能性があり、サルの生息状況の全容を明らかにするには、さらに調査を進める必要があるといえる。

冷温帯林に生息するニホンザルの生態と  
生息環境の保全  
船越美穂(京都大・霊長研・社会生態)

夏期の人工針葉樹の樹皮食が近年報告されている中部山岳地帯安曇野地方で、1997年2月以降、4群を対象に調査を行っている。

今年度は、夏期におけるニホンザルの樹皮食が、群れの採食活動全体の中で、時期的及び、栄養的にどのような位置付けになるのか明らかにするために、周年における採食品目の詳細な移り変わりと、カラマツの採食部位である周皮を含めた主要採食品目の栄養組成を調べた。

行動域の大きさ、個体数、生息高度、季節移動様式がほぼ同じ2群で調べた結果、行動域内広葉樹面積が少ない群れでは、サクラ類の果実が採食されている割合が低く、カラマツの採食が多いことが解った。

今回行った4群についての糞分析から、糞中に木質部(カラマツ)が出現するのは、サルナシとミズキ、ヤマブドウなどの秋期性果実の採食が始まる前で、シナノザサの茎内未展開葉及び、サクラ類とキイチゴ類の夏期性果実を採食している時期であることが解った。

栄養分析の結果から、カラマツ周皮の栄養価は、炭水化物割合が高くタンパク質割合の低いキイチゴ類とサクラ類の果実に近く、タンパク質割合が高く炭水化物割合の低いシナノザサの未展開葉やその中間の広葉樹の葉とは異なることが解った。

よって、広葉樹であるサクラ類の少ない群れでは、炭水化物を補うために、カラマツ周皮を多く採食するようになったと考えられた。